

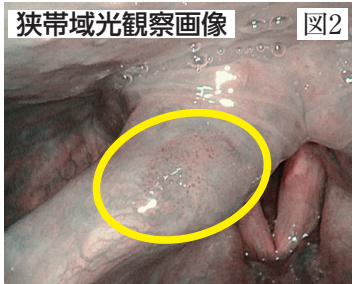
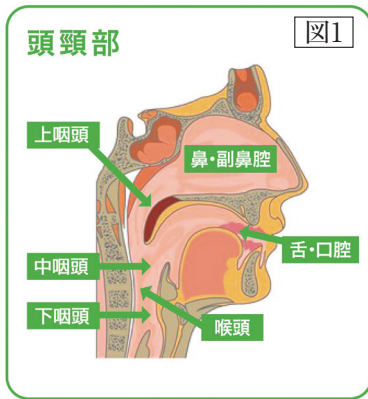
頭頸部がんの 診断・治療の進歩



長野市民病院
頭頸部外科部長
横溝 道範
よこみぞ みちのり

◆頭頸部とは

頭頸部は、顔面から首までを指し、おおよそ脳の下から鎖骨までの範囲で、耳、鼻、副鼻腔、のど、口腔、甲状腺、耳下腺などが含まれます(図1)。当科では、主にこの領域のがん治療を対象にしています。



◆診断・治療の進歩

医学の進歩に合わせ頭頸部がんの診断・治療も少しずつ進歩しています。今回はその一部をご紹介します。

ファイバースコープ(診断)の進歩

苦痛が少なく、のどの奥を観察できるファイバースコープがデジタル化され、解像度が飛躍的に改善しました。さらに狭帯域光観察(NBI)という内視鏡検査で用いられる特殊な光で病変を明確にする観察技術により、肉眼で

頭頸部がんは、食事・会話・呼吸に影響するため進行がんほど発声、咀嚼(そしゃく)・嚥下(えんげ)で飲み込むこと、風貌に大きな後遺症を残す傾向があり、早期発見・治療法の選択が重要です。診療は耳鼻いんこう科と一体となって進めています。

放射線治療の進歩

は分からない変化を見つけられるようになり、ごく浅いがんを発見できるようになりました(図2)。

今までの放射線治療では、がん細胞の周囲にある正常組織をなかなか避けられず、放射線量に制限が生じていました。しかし、当院にあるIMRT(強度変調放射線治療)という特殊な技術によりがん細胞だけに高い線量を集中させ、周囲の正常組織への線量を減らすことが可能になりました。さらにVMAT(強度変調回転照射法)というIMRTの進化形の照射法も当院では実施でき、治療時間の短縮が可能となっています。

抗がん剤治療の進歩

抗がん剤の副作用に対する研究が進み、抗がん剤をより安全に投与できるようになり、治療成績が向上しています。例えば喉頭がんでの声帯の温存率などに成果がみられています。さらにがん細胞を直接攻撃するのではなく、がん細胞の増殖を抑制する働きを持つ分子標的薬が頭頸部がんにも使われ始め、治療の選択肢が格段に増えました。特に甲状腺の未分化がんでは、非常に良い成績が報告されています。また、医療費の問題はありますが、話題の新薬のオプジーボ(免疫治療薬)も使えるようになり、今後の展開が期待されます。

外科治療の進歩

外科治療に関しては、手術ナビゲーションシステムの進歩が目立っています。この装置は、車のカーナビ同様の手術部位(目的地)と手術器具(現在地)の位置関係をリアルタイムで把握することができ、頭頸部は複雑な構造となっているため、神経や血管を傷つけないよう、この装置を用い、合併症を起こさず、ピンポイントで病巣にたどり着き手術ができるようになりました。

裏面もご覧ください

長野市民病院 第31回 市民健康講座

平成29年9月30日(土)

場所 東部文化ホール

開場 13:00 開演 14:00

参加無料・申込不要

柳原駅より
徒歩5分



第1部 「頭頸部がんの症状と最新の治療」

講師:長野市民病院 頭頸部外科部長 横溝 道範

第2部 「心臓血管外科とは ～心臓にメスを入れるということ～」

講師:長野市民病院 心臓血管外科医長 中原 孝

※お問合せ先 長野市民病院 教育研修・メディアセンター 026-295-1199(代)
※多少時間が前後する場合がございます。何卒お含みおきくださいますようお願いいたします。

知っておきたい ミニ知識

長野市民病院
心臓血管外科医長
心臓血管センター医長
中原 孝
なかはら こう



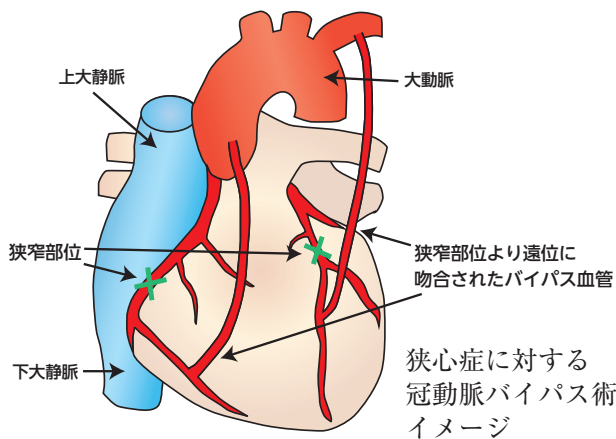
◆心臓とは…

心臓は胸の真ん中にあり、血液を全身に送り出すポンプの役割をしている臓器です。1分間に約60～90回拍動し、その拍動は一生涯休むことはありません。心臓から送り出された血液は動脈によって全身に運ばれ、臓器や筋肉に酸素と栄養素が届きます。そして、血液は静脈を通じて心臓に戻ってきます。その大きな流れを体循環（大循環）と言います。また、心臓は肺とも動静脈でつながっており、血液中の酸素のやりとりをしています。その循環を肺循環（小循環）と言います。心臓は2つの循環を通して全身のあらゆる臓器とつながり、それぞれの臓器の維持に重要な役割を担っています。

◆心臓血管外科で扱う病気

心臓血管外科では心臓、動脈、静脈の疾患の外科治療を中心に診療しています。心臓の病気としては心臓を栄養する冠動脈が狭くなる狭心症や心臓の各部屋の逆流を防いでいる弁に異常を来たす弁膜症があります。いずれも初期の段階では症状は

心臓血管外科とは ～心臓にメスを入れるということ～



ほとんどなく、検診で見つかることも多い病気です。病気が進行して動悸、息切れ、胸痛などを感じた時には速やかに医療機関へ受診することが大切です。早期の治療が必要になる場合があります。特に心臓はその特性から、より早急な治療介入が必要となる場合もあります。

また、大動脈は心臓から出た血液を全身に送る役割をしています。動脈硬化などにより血管が瘤（こぶ）のように大きくなる、あるいは逆に内腔を細く（狭窄）させることもあります。そういった場合は症状の有無に関わらず、治療を行う場合もあります。さらに、大動脈の壁が縦に裂ける大動脈解離という病気では緊急手術が必要となる場合もあります。

◆治療について

当院では、循環器内科、麻酔科、その他の医療スタッフとハートチームを形成しており、内服薬による治療やカテーテル治療、あるいは手術といった治療法を決定し、患者さんにベストな治療の選択を行っています。また、手術の際には信州大学、および長野市近隣の病院の心臓血管外科の協力のもとに、当院での手術が可能であり、本年6月より手術を開始しています。



ハートチームイメージ



▲当院における心臓血管外科手術

TOPICS

か し じょうみやくりゅう 下肢静脈瘤に対するレーザー治療を開始しています



下肢静脈瘤の状態の足

下肢静脈瘤とは、足の静脈が太く浮き出たり、こぶのように膨らんだりする疾患です。足のだるさやむくみなどの症状を引き起こし、QOL（生活の質）を低下させることもあります。

治療法は、弾性ストッキング等を着用する圧迫療法その他、外科治療の一つにレーザー焼灼術があります。血管内にカテーテルを通して、内側からレーザーを照射し病変部を焼灼します。切開をしないため、身体に負担の少ない治療法として注目されています。当院でも短期間の入院でレーザー治療を行うことが可能です。

下肢静脈瘤と思われる場合は、まずかかりつけ医の受診をお願いいたします。その後、かかりつけ医の判断のもと、当院心臓血管外科に紹介状を発行していただき、事前に予約の上ご来院ください。